琉球大学学術リポジトリ

沖縄におけるライフコースのコーホート間比較調査 中間報告：調査報告書

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部社会学学科
	公開日: 2009-03-04
	キーワード (Ja): ライフコース, ライフサイクル, 生涯発達, コーホート分析, 役割移行, 社会史, 沖縄
	キーワード (En):
	作成者: 安藤, 由美, Ando, Yumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9048

2　対象者のプロフィール

ライフコースの個々の経歴の説明にはいる前に、本章では、調査の対象者の基本属性を述べておこう。以下では、出生地と現住地での居住開始時期、世帯の属性、対象者個人の社会的属性、その他、の４つに分けてみていこう。

表2-1　出生地

単位：人

		現住地	出生地 豊見城村	西原町	南風原町	県内	県外	外国	N
男	C－Ⅰ	豊見城村	9			5	1		15
			60.0%			33.3%	6.7%		100.0%
		西原町		13		6			19
				68.4%		31.6%			100.0%
		南風原町			12	2		1	15
					80.0%	13.3%		6.7%	100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	9	13	12	13	1	1	49
			18.4%	26.5%	24.5%	26.5%	2.0%	2.0%	100.0%
	C－Ⅱ	豊見城村	6			8			14
			42.9%			57.1%			100.0%
		西原町		8		9	1	2	20
				40.0%		45.0%	5.0%	10.0%	100.0%
		南風原町			22	8	1	1	32
					68.8%	25.0%	3.1%	3.1%	100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	6	8	22	25	2	3	66
			9.1%	12.1%	33.3%	37.9%	3.0%	4.5%	100.0%
女	C－Ⅰ	豊見城村	15			5	1		21
			71.4%			23.8%	4.8%		100.0%
		西原町		8		6		2	16
				50.0%		37.5%		12.5%	100.0%
		南風原町			11	7		1	19
					57.9%	36.8%		5.3%	100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	15	8	11	18	1	3	56
			26.8%	14.3%	19.6%	32.1%	1.8%	5.4%	100.0%
	C－Ⅱ	豊見城村	10			10		1	21
			47.6%			47.6%		4.8%	100.0%
		西原町		5		7	1	1	14
				35.7%		50.0%	7.1%	7.1%	100.0%
		南風原町	2	1	8	13			24
			8.3%	4.2%	33.3%	54.2%			100.0%
		ｺｰﾎｰﾄ計	12	6	8	30	1	2	59
			20.3%	10.2%	13.6%	50.8%	1.7%	3.4%	100.0%

注：出生地のカテゴリーのうち、西原町と南風原町は、それぞれ旧西原村、南風原村を含む。

2.1 出生地と居住開始時期

出生地　表2-1にあるように、男女ともに9割以上の人が県内の出身である。県外出身者はいずれのコーホートにおいても2〜5名程度である。現住所と同じ町村の出身者は、C-Ⅰでは過半数を占めるが、C-Ⅱでは、男性の南風原町出身者をのぞき、半数を切っている。

居住開始時期　現住地への居住開始年は、C-Ⅱの男性をのぞく、3つのグループでは、1940年代に1つの山がみられる。また、C-Ⅰの女性をのぞく、3つのグループでは、1970年代に1つの山がある。前者は、終戦直後に今のところに住み始めたケースを、後者は、沖縄の本土復帰のあたりに現住地に住み始めたケースが含まれているといえよう（表2-2）。居住開始年齢の分布も、前述の居住年のそれに対応した傾向となっている（表2-3）。男女の違いとして指摘しておきたいこととして、女性の多くは、結婚とともに居住地を移動しているので、男性に比べて、現住地への居住開始年では遅く、また年齢は高い。

表2-2　居住開始年

		1910年代	1920年代	1930年代	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	N (100%)
男	C-Ⅰ	16.3	2.0	2.0	24.5	10.2	8.2	20.4	16.3	-	49
	C-Ⅱ	-	15.2	1.5	13.6	9.1	6.1	33.3	15.2	6.1	66
女	C-Ⅰ	3.6	-	23.2	23.2	12.5	8.9	16.1	8.9	3.6	56
	C-Ⅱ	-	-	-	30.5	10.2	8.5	30.5	15.3	5.1	59

表2-3　居住開始年齢

		0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	N (100%)
男	C-Ⅰ	16.3	4.1	6.1	26.5	4.1	20.4	12.2	10.2	49
	C-Ⅱ	15.2	3.0	19.7	6.1	21.2	24.2	10.6	-	66
女	C-Ⅰ	3.6	12.5	17.9	26.8	7.1	14.3	10.7	7.1	56
	C-Ⅱ	-	3.4	32.2	8.5	20.3	25.4	10.2	-	59

2.2 世帯の属性

世帯規模　対象者の家族規模をつかむために同居世帯人数をみてみると、表2-4にあるように、男性に比べ、女性は同居人数が少ない人の割合が高い。特に女性は一人暮らし世帯の割合が高い。ちなみに、対象者全体の同居世帯人数

琉球大学附属図書館

の平均は 3.18 人であった。

表2-4　世帯人数

		1人	2人	3～5人	6人以上	N (100%)
男	C－Ⅰ	6.1	30.6	30.6	32.6	49
	C－Ⅱ	3.0	28.8	53.1	15.2	66
女	C－Ⅰ	17.9	25.0	28.6	28.6	56
	C－Ⅱ	11.9	23.7	37.3	27.1	59

注）全体平均＝3.18人

世帯構成　対象者が現在暮らしている世帯の構成では、世帯規模でもみたように、女性の単身世帯率は高く、男性の3倍以上である。夫婦世帯、核家族世帯については、各コーホートとも男性の該当者が多い。直系世帯率は、男女とも、C-Ⅱに比べC-Ⅰが高い。男女で比較したばあい、女性の直系世帯率が高い。これらをまとめると以下のように言えるだろう。女性は男性に比べ、単身世帯と直系世帯が多い。男性は女性に比べ、夫婦世帯や核家族世帯が多い。また、男女を通じて、C-Ⅱに比べて、C-Ⅰでは単身世帯と直系世帯が多い。こうした傾向は対象者と配偶者の年齢差による死別・対象者の高齢化による既婚子との同居などが原因と考えられよう。後述するが、C-ⅡよりもC-Ⅰが既婚子との同居経験率が高く、男性よりも女性に配偶者との死別率が高くなっているからである（表2-5）。

表2-5　世帯構成

		単身	夫婦	核家族	直系家族	N (100%)
男	C－Ⅰ	6.1	28.6	22.4	42.9	49
	C－Ⅱ	3.0	25.8	31.8	39.4	66
女	C－Ⅰ	17.9	14.3	10.7	57.1	56
	C－Ⅱ	11.9	22.0	23.7	42.4	59

世帯主からみた続柄　男性では、ほとんどのばあい、対象者本人が世帯主である。ただし、C-Ⅰにおいてはその割合がC-Ⅱよりも低く、子どもが世帯主というケースが増える。配偶者が世帯主というケースはなかった。一方、女性では、本人が世帯主

表2-6　世帯主との続柄

		本人	配偶者	親	子	N (100%)
男	C－Ⅰ	79.6	-	18.4	2.0	49
	C－Ⅱ	93.9	-	6.1	-	66
女	C－Ⅰ	32.1	26.8	41.1	-	56
	C－Ⅱ	25.4	55.9	16.9	1.7	59

であるばあいは少なく、C-Ⅰでは世帯主の親、C-Ⅱでは同配偶者が一番多い。C-Ⅰで、配偶者の割合が減り、本人もしくは親が多くなっているのは、いうまでもなく、夫と死別しているケースであろう。特に、前者は、単身世帯率の高さと対応している（表2-6）。

持ち家率　表2-7にみられるように、対象者のほぼ全員が持ち家の居住者である。

農業の有無　対象地である3町村がいずれも以前は純農村であったという背景を考慮して、現在の世帯における農業の有無、定位家族および配偶者の実家の農業の有無をみておこう。対象者の世帯が現在農家である割合は、どのグループも3割前後であった。男性よりも、女性に、C-ⅠとC-Ⅱとの差が大きい（表2-8）。

これに関連して、対象者および配偶者の実家の家業が農業であったかどうかをみておこう。まず、対象者本人の実家の家業が農家であった率は、C-Ⅰでは男女ともに8割以上、C-Ⅱでは男女共に7割以上と、高率を示した（表2-9）。

配偶者の実家も、やはり農家である割合が高く、男女ともにC-Ⅰでは9割以上が、またC-Ⅱでも7割以上が配偶者の実家は農家であった（表2-10）。

表2-7　持ち家率

		持ち家	借家	N (100%)
男	C-Ⅰ	98.0	2.0	49
	C-Ⅱ	97.0	3.0	66
女	C-Ⅰ	98.2	1.8	56
	C-Ⅱ	94.9	5.1	59

表2-8　農業の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	32.7	67.3	49
	C-Ⅱ	36.4	63.6	66
女	C-Ⅰ	25.0	75.0	56
	C-Ⅱ	40.7	59.3	59

表2-9　定位家族での農業の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	81.6	18.4	49
	C-Ⅱ	74.2	25.8	66
女	C-Ⅰ	87.5	12.5	56
	C-Ⅱ	72.9	27.1	59

表2-10　配偶者実家での農業の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	91.8	8.2	49
	C-Ⅱ	75.8	24.2	66
女	C-Ⅰ	92.6	7.4	54
	C-Ⅱ	77.6	22.4	58

注：C-Ⅰ女性の不明1人をのぞく。

鶴見大学図書館

2.3 対象者個人の社会的属性

現在の結婚上の地位　表2-11にみられるように、男性の配偶者（妻）は健在なばあいが多いが、女性の配偶者（夫）は、C-ⅠがC-Ⅱよりも離死別の割合が高い。具体的な数値をあげると、男性についてはC-Ⅰ、C-Ⅱどちらのコーホートも既婚が多く、両者とも約9割を占めた。なお男性の未婚者はいなかった。一方、女性のばあいは、C-Ⅰにおいて離死別の割合が66.1%と半数を超えているのが特徴的である。逆に、C-Ⅱにおいては既婚が74.6%である。しかし同じコーホートの男性と比べると離死別の割合が高い。なお、女性ではC-Ⅰ、C-Ⅱに1人ずつ未婚の人がいた。

表2-11　結婚上の地位

		既婚	離死別	未婚	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	89.8	10.2	-	-	49
	C-Ⅱ	90.9	9.1	-	-	66
女	C-Ⅰ	32.1	66.1	1.8	-	56
	C-Ⅱ	74.6	22.0	1.7	1.7	59

最終学歴　対象者の最終学歴は、表2-12にみられるように、初等教育終了者が対象者の大多数をしめた。どのグループも7割以上の人が初等教育の終了者である。ただし、C-Ⅰに比べC-Ⅱではその割合は若干減少し、中等以上の教育終了者がわずかながら増加する。また、総じて男性に比べ女性の学歴が低いといえる。

表2-12　最終学歴

		初等	中等	準高等	高等	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	85.7	12.2	-	-	2.0	49
	C-Ⅱ	74.2	21.2	3.0	1.5	-	66
女	C-Ⅰ	96.4	3.6	-	-	-	56
	C-Ⅱ	88.1	11.9	-	-	-	59

現在の仕事の有無　現在職業についているか、すなわち現職の有無をみると、有職者の率が高かったのは、コーホート別ではC-Ⅱ、男女別では男性であった。とくにC-Ⅱの男性のばあい51.5%が現在職業についている。60代後半

の男性にとって、まだ仕事から引退するのは早いということだろう。また、今回の対象者には農家も多く、それも関連があると考えられる（表2-13）。

表2-13　現職の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C－Ⅰ	26.5	73.5	49
	C－Ⅱ	51.5	48.5	66
女	C－Ⅰ	14.3	85.7	56
	C－Ⅱ	32.2	67.8	59

現職の内容　現職の内容をみてみると、農業を含めた自営業が全体の70%以上を占め、そのうち、C-Ⅰの女性以外は半数以上が農業に従事し、C-Ⅱの男性だけがブルーカラーの割合が高くなっている。自営業が多いのは、被雇用職と異なり、定年がないため、高齢になっても働けるからであろう（表2-14）。

表2-14　現職の内容

		ホワイト1	ホワイト2	ブルー	自営1	自営2	農業	その他	N (100%)
男	C－Ⅰ	-	-	7.7	-	23.1	61.5	7.7	13
	C－Ⅱ	5.9	-	17.6	2.9	5.9	64.7	2.9	34
女	C－Ⅰ	-	-	-	-	62.5	37.5	-	8
	C－Ⅱ	5.3	5.3	5.3	-	21.1	52.6	2.0	19

2.4 その他

大病・けが、生まれつきの障害の有無　大病・けがの経験があるかという質問に対しては、全体的に女性よりも男性のほうに経験率が高かった。男性が 40～50%台であるのに対し、女性は 30%台であった。男性についてみるとC-Ⅰの経験率が若干高く、C-Ⅰで 53.1%、C-Ⅱで 45.5%の経験率であった。女性についてみるとC-Ⅱの経験率が若干高く、C-Ⅰ 32.1%、C-Ⅱ 39.0%となった（表2-15）。回数については全コーホートを通じて１回

表2-15　大病・けが経験

		あり	なし	N (100%)
男	C－Ⅰ	53.1	46.9	49
	C－Ⅱ	45.5	54.5	66
女	C－Ⅰ	32.1	67.9	56
	C－Ⅱ	39.0	61.0	59

滋賀大学附属図書館

というのが最も多かった。

大病・けがの経験年齢（初回の経験）についてはいずれのコーホートも中央値は 50 歳代であった（表2-16）。

表2-16　大病・けがの経験年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C−Ⅰ	25	37.1	56.0	71.3	34.2
	C−Ⅱ	30	19.3	56.5	62.3	43.0
女	C−Ⅰ	17	31.8	58.0	60.3	28.5
	C−Ⅱ	23	40.3	53.8	61.8	21.5

大病・けがの影響については、結婚・職業生活・人生観など、影響なしも含めて 13 のカテゴリーから影響があったと思われる事柄をすべて選んでもらった。その結果、男女・コーホート間を通じて「影響なし」と回答した人の割合が最も多かった。ただし男性では職業生活に「影響あり」と回答した人がC-Ⅰで 26.9%、C-Ⅱで 30.0%いた（表2-17）。

表2-17　大病・けがの影響の有無と種別

		なし	職業生活	生活習慣	結婚
男	C−Ⅰ	61.5	26.9	3.8	-
	C−Ⅱ	46.7	30.0	10.0	3.3
女	C−Ⅰ	61.1	5.6	11.1	-
	C−Ⅱ	73.9	8.7	-	-

（続き）

		出産	親子関係	人生観	その他	複数	不明	N (100%)
男	C−Ⅰ	-	-	-	3.8	-	3.8	26
	C−Ⅱ	-	-	-	-	10.0	-	30
女	C−Ⅰ	-	5.6	5.6	-	12.2	-	18
	C−Ⅱ	4.3	-	4.3	4.3	4.3	-	23

なお、生まれつきの障害があるかという問に対して、男性はC-Ⅰで１人、C-Ⅱで３人、女性はC-Ⅰでは０人、C-Ⅱで１人があると回答したがいずれのケースも影響なしと回答している。

兵役経験　兵役は、男性の両方のコーホートにおいて半数以上の人が経験していた。C-Ⅰは 69.4%と、３人に２人の割合で兵役を経験している（表2-18）。経験回数は、ほとんどが１回であるが、C-Ⅰの約４分の１は、２度以上経験していた。C-Ⅱでは全員が１回である（表2-19）。このように、多くの人

が兵役経験は 1 回であるため、経験時機については、初回のものについて述べる（表2-20～23）。

まずC-Ⅰから見てみると、兵役の開始年の中央値は 1938（昭和 13）年であり、終了年は 1944（昭和 19）年であった。開始と終了の年齢は、それぞれ 21.3 歳と 27.5 歳であった。

一方、C-Ⅱでは、兵役開始年の中央値が 1944（昭和 19）年、終了年は 1945（昭和 20）年であり、開始と終了の年齢は、それぞれ 18.9 歳、19.7 歳であった。C-Ⅰと比べると、C-Ⅱは、成人前の短期間に集中的に兵役を経験したことになり、歴史的年代では、太平洋戦争末期にあたっていた。

出征した地域にもコーホート間で違いがみられる。C-Ⅰは約 7 割の人が国外で兵役を経験しているのに対し、C-Ⅱでは逆に約 7 割の人が国内で兵役を経験している。初回の兵役にかんする限り、前者については日中戦争・太平洋戦争への参加、後者については沖縄戦への動員であろう。

表2-18　兵役経験の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	69.4	30.6	49
	C-Ⅱ	57.6	42.4	66

表2-19　兵役回数

		1回	2回	3回	N (100%)
男	C-Ⅰ	73.5	23.5	2.9	34
	C-Ⅱ	100.0	-	-	38

表2-20　兵役開始年齢

CHT	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	34	20.3	21.3	26.6	6.3
C-Ⅱ	38	17.6	18.9	19.8	2.2

表2-21　兵役終了年齢

CHT	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	34	24.0	27.5	29.6	5.6
C-Ⅱ	38	18.6	19.7	21.2	2.6

表2-22　兵役開始年

CHT	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	34	1936.9	1938.3	1942.9	6.0
C-Ⅱ	38	1943.9	1944.4	1944.9	1.0

表2-23　兵役終了年

CHT	N	Q1	Med.	Q3	QR
C-Ⅰ	34	1940.1	1944.6	1945.4	5.3
C-Ⅱ	38	1944.9	1945.2	1945.9	1.0

表2-24　出征地域

		国内	国外	N (100%)
男	C-Ⅰ	26.5	73.5	34
	C-Ⅱ	71.1	28.9	38

滋賀大学附属図書館

手持ち資産の主観的評価　　対象者の経済階層を間接的に知るために、現在の手持ち資産（預貯金・不動産など）だけでどの程度の期間生活できるかをたずねた。回答カテゴリーは、表2-25のような、「全く暮らせない」から「5,6年ぐらい」「それ以上」など７つのカテゴリーを用意した。手持ち資産だけで「1年」以上暮らせると回答した人は女性に比べ男性が多かった。男性は手持ち資産だけでは暮らせないもしくは「1,2ヶ月」と答えるか、「1年以上」暮らせると答えるか大きく答えが割れるのに対して、女性は「半年」から「1年」という中間派の数が男性よりも多かった。また、コーホート間では、総じて男女ともにC-Ⅰは C-Ⅱに比べて手持ち資産を低く評価する傾向があった。

表2-25　手持ち資産の主観的評価

		暮らせぬ	1,2ヶ月	半年	1年	2,3年	5,6年	それ以上	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	36.8	6.1	4.1	4.1	4.1	10.2	26.5	6.1	49
	C-Ⅱ	15.2	10.6	6.1	7.6	9.1	1.5	50.0	-	66
女	C-Ⅰ	35.7	10.7	10.7	12.5	5.4	1.8	16.1	-	56
	C-Ⅱ	28.8	5.1	15.3	6.8	15.3	5.1	13.6	10.2	59

階層帰属意識　　階層帰属意識についてみると、中の上・中の下と回答した人が男女共に７割を超えた。男性では約７割が中流意識をもっているのに対し、女性はC-Ⅰ・C-Ⅱ共に８割を超え、男性より女性に中流意識が強いことがうかがえる。また階層を上および中の上と、中の下および下という、２つのグループに分けてみたばあい、男性は、C-ⅠよりもC-Ⅱのほうが現在の階層を比

表2-26　階層帰属意識

		上	中の上	中の下	下	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	4.1	38.8	42.9	12.2	2.0	49
	C-Ⅱ	9.1	42.4	33.3	13.6	1.5	66
女	C-Ⅰ	7.1	44.6	41.1	5.4	1.8	56
	C-Ⅱ	8.5	39.0	45.8	6.8	-	59

較的高くみている。これとは反対に、女性のばあい、C-Ⅰに比べC-Ⅱは現在の階層を比較的低くみている（表2-26）。

人生観　対象者が現在もっている人生観について、「人生はなにによって決まるか」と質問し、「努力」（努力派）、「偶然」（偶然派）、「生まれる前から決まっている」（宿命派）という 3 つのカテゴリーから選んでもらった（表2-27）。いずれのコーホートにおいても人生は自分自身の努力や能力で決まるという努力派の割合が多かった。ただし性別や年齢によってその数は大きく異なる。まず各コーホートごとに回答の多かった順に選択肢をならべてみる。男性は、C-Ⅰが努力派・宿命派・偶然派の順、C-Ⅱが努力派・宿命派・偶然派、女性はC-Ⅰが努力派・宿命派・偶然派、C-Ⅱが宿命派、努力派、偶然派の順であった。

表2-27　人生観

		努力派	偶然派	宿命派	N (100%)
男	C-Ⅰ	61.2	8.2	28.6	49
	C-Ⅱ	71.2	9.1	19.7	66
女	C-Ⅰ	51.8	10.7	33.9	56
	C-Ⅱ	45.8	6.8	47.5	59

男女別にみたばあい、常に男性に努力派が多く、C-Ⅰで男性が 61.2%、女性が 51.8%、C-Ⅱでは男性が 71.2%、女性は 45.8%が人生は努力で決まると回答している。また女性は男性に比べ、生まれる前から人生は決まっていると答える宿命派が多いのも特徴である。C-Ⅰでは男性の 28.6%、女性の 33.9%、C-Ⅱでは男性の 19.7%、女性の 47.5%が宿命派である。偶然で人生が決まるいう偶然派は各コーホートにおいて最も少なく、パーセンテージでも実数でも大きな差はない。年齢別にみたばあい、男性においては、C-ⅠよりC-Ⅱにおいて努力派の割合が多い。宿命派は逆にC-Ⅱになると減少する。女性においては、C-ⅠよりC-Ⅱにおいて努力派の割合が減少する。宿命派はC-Ⅱでは増加し、努力派と宿命派がほぼ拮抗している。

以上、調査対象者のプロフィールについて、おもに現在（調査時点）の属性を中心にみた。次章以下では、ライフコース上の出来事経験を、家族、職業などの社会的役割（または生活）領域ごとにみていこう。

（宮平隆央）

龍谷大学附属図書館

3　家族経歴

個人は家族の中に生まれて成長し、やがて配偶者を得て、自分の家族をつくる。個人が家族の中で保有する役割の種類や数は、きょうだいの誕生や親の死亡、結婚、子どもの出生、孫の誕生、配偶者の死亡といった重要な出来事を節目として、大きく変化するだろう。また、同じ役割（たとえば、子ども役割）でも、親からの離家や経済的独立、あるいは自分の結婚といった出来事によって、その質が変化するだろう。こうした変化は、家族員同士の相互作用によってももたらされるが、そればかりでなく、個人や家族を取り巻く社会的・歴史的条件によっても大きく左右されてくる。とりわけ、われわれの対象者のばあい、沖縄戦を含む第二次世界大戦が、家族経歴上の出来事の経験に大きな影響を及ぼしたことが明らかにされるだろう。本章では、そうしたライフコース上での家族役割の過程、すなわち家族経歴を、今あげたような重要な出来事の有無や経験時機などから考察していく。以下では、個人が歩む家族経歴を、子どもとして親と関わり合う「子ども役割」、結婚とともに獲得する「夫婦（夫・妻）役割」、子どもが生まれて獲得する「親役割」の３つの局面に分け、順次それらを構成する重要な出来事の経験についてみていこう。

3.1 子ども役割の変容と喪失

本節では、子ども役割の変容と喪失について考察する。個人は、生まれ落ちた瞬間から子ども役割を取得し、成長するにつれて子ども役割を変容させていく。子ども役割の変容をもたらす出来事として、ここでは初離家、親からの経済的独立、親への経済的・非経済的援助を想定している。また、子ども役割の喪失とは、親の死亡によって、子どもとしての役割を失うことをいうのであるが、親の死亡は、子どもにとって最も重要な出来事の一つであると考えられる。

3.1.1　子どもとしての位置

表3-1で、対象者の、親からみた続柄をみると、長男・長女の割合はどのコーホートも3～4割であった。きょ

表3-1　親からみた続柄

		長男・長女	長男・長女以外	N (100%)
男	C－Ⅰ	36.7	63.3	49
	C－Ⅱ	42.4	57.6	66
女	C－Ⅰ	44.6	55.4	56
	C－Ⅱ	35.6	65.4	59

うだい人数（本人を含む）の平均は、C-Ⅰ男性が5.8人、C-Ⅱ男性が6.0人、C-Ⅰ女性が5.7人、C-Ⅱ女性が6.2人となっており、各コーホートともそれほど差はみられなかった（3.3節、表3-40）。

3.1.2 あととり予定と実際

対象者本人があととりかどうかを、予定者であったかどうか、そして実際にあとをとったかどうかという、2つの点からみてみよう。なお、女性のあととり予定者もしくは実際者は、それぞれどのコーホートも1ないし2名であったので、ここでは男性のみについてふれる。本人があととり予定者であった割合は、C-Ⅰが46.9%、C-Ⅱが47.0%となっている（表3-2）。また、実際にあとをとった人の割合は、C-Ⅰが59.2%、C-Ⅱが53.0%であった（表3-3）。このように、どちらのコーホートも、予定者の割合よりも、実際者の割合のほうが大きい。これは、ほんらい自分以外のきょうだいがあととり予定者であったが、何らかの事情でそれがかなわず、対象者本人が結果的にあとをとったケースがあることを示唆している。その比率の差は、どちらかといえば、C-ⅡよりもC-Ⅰのほうが大きい。このようなずれは、常に起こりうるといえるが、われわれの対象者のばあい、このコーホート間の違いは、ほんらいのあととり予定者が実際にあととりとなれなかった理由に、戦争に関連する原因とするケースが、C-ⅡよりもC-Ⅰのほうにより多く含まれていることを予想させる。もっとも、あくまでもこれは推測であり、もっと分析を進めてみる必要があろう。

表3-2 あととり予定者

		本人	本人以外	わからない・なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	46.9	51.0	2.0	49
	C-Ⅱ	47.0	53.0	-	66
女	C-Ⅰ	1.8	84.0	14.3	56
	C-Ⅱ	1.7	96.6	1.7	59

表3-3 あととり実際者

		本人	本人以外	わからない・なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	59.2	34.7	6.1	49
	C-Ⅱ	53.0	47.0	-	66
女	C-Ⅰ	1.8	85.7	12.5	56
	C-Ⅱ	3.4	88.1	8.5	59

3.1.3 初離家

離家とは、進学、就職、入隊、結婚などにともなって親もとを離れる出来事をいう。とりわけ、初めての離家である初離家は、親の直接的な保護を受けな

福井大学附属図書館

くなるという点で、子ども役割の変容をもたらす重要な出来事の一つだと考えられる。

まず、離家経験からみると、表3-4からもわかるように、男性よりも女性の経験者の割合が高くなっている。これは、女性はふつう結婚とともに離家するので、ある意味で当然の結果であるといえるが、男性は女性に比べ、「非経験」（離家を経験する前に親が死亡した）の割合が多いということに注目する必要がある。男性は、C-Ⅰが12.2%、C-Ⅱが16.7%であるのに対し、女性の非経験者は、C-Ⅰが8.9%、C-Ⅱが6.8%である。とくに、C-Ⅱの経験率の男女差は10%近い。

表3-4　離家経験有無

		あり	未経験	非経験	N (100%)
男	C-Ⅰ	87.8	-	12.2	49
	C-Ⅱ	83.3	-	16.7	66
女	C-Ⅰ	91.1	-	8.9	56
	C-Ⅱ	93.2	-	6.8	59

初離家年齢は、C-Ⅱの方がC-Ⅰに比べて初離家年齢が若い。とくに、男性にコーホート差が大きい（表3-5）。2つのコーホートの出生年から考えると、C-Ⅱが初離家した時期がちょうど太平洋戦争の時期と重なっていたと予想される。そこで、C-Ⅱの初離家年をみると、実際に中央値を中心に、半数の人は戦争中に離家していたのである（表3-6）。

表3-5　初離家年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	43	14.4	19.3	22.6	8.2
	C-Ⅱ	55	15.0	16.9	19.3	4.3
女	C-Ⅰ	51	16.2	19.0	21.6	5.4
	C-Ⅱ	55	15.0	18.3	20.7	5.7

表3-6　初離家年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	43	1930.7	1936.3	1938.3	7.6
	C-Ⅱ	55	1941.4	1943.4	1945.0	3.6
女	C-Ⅰ	51	1932.6	1934.7	1937.6	5.0
	C-Ⅱ	55	1941.5	1944.4	1946.9	5.4

3.1.4　初離家以前の親との別居

ここでは、初離家以前の親との別居をとりあげる。これは、上でみた離家とは異なり、親が子どもを家に残して出稼ぎなどにいくことによる親子の別居のことをさしており、戦前の沖縄では、父親または両親が祖父母に子どもを預けて海外に出稼ぎや移住をすることが多かったことを考慮して設けた質問項目で

あった。

表3-7の初離家以前の別居経験の有無をみてみると、C-Ⅱの経験率がC-Ⅰの経験率に比べて高くなっている。とくにC-Ⅱ男性の経験率が、24.2%と高い。どちらの親と別居したかでは、どのコーホートも父親との別居が多く、少なくとも父親と別居したことがある人は、この出来事の経験者全体38人中34人であった（表省略）。

表3-7　初離家以前の親との別居経験の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	12.2	87.8	49
	C-Ⅱ	24.2	75.8	66
女	C-Ⅰ	12.5	87.7	56
	C-Ⅱ	15.3	84.7	59

3.1.5　親からの経済的独立

親からの経済的独立の経験率は、男性よりも女性のほうが高くなっている（表3-8）。女性では、経済的独立が初婚と重なることが多いと思われる。一方、男性では、非経験（独立以前に親が死亡）が女性よりも多いことが目立つが、このなかには、あととりであるために、経済的独立を経験しなかった人が含まれていよう。

表3-8　親からの経済的独立有無

		あり	未経験	非経験	N (100%)
男	C-Ⅰ	79.6	-	20.4	49
	C-Ⅱ	86.4	-	13.6	66
女	C-Ⅰ	94.6	-	5.4	56
	C-Ⅱ	91.5	-	8.5	59

表3-9の経済的独立年齢の中央値をみてみると、男女いずれのコーホートとも20歳前後であるが、C-Ⅰの男性が他のコーホートに比べやや高い。第3四分位数ではさらに高くなっている。ここでも、経済的独立の年次をみると、C-Ⅰ男性の第3

表3-9　親からの経済的独立年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	39	17.4	22.3	28.6	11.2
	C-Ⅱ	57	15.8	19.3	23.8	8.0
女	C-Ⅰ	53	17.5	19.9	22.4	4.9
	C-Ⅱ	54	17.3	19.8	21.3	4.0

表3-10　親からの経済的独立年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	39	1933.3	1938.0	1945.0	11.7
	C-Ⅱ	57	1942.6	1946.1	1950.1	7.5
女	C-Ⅰ	53	1933.5	1935.2	1939.4	5.9
	C-Ⅱ	54	1942.8	1946.1	1947.9	5.1

東京大学附属図書館

四分位数は1945（昭和20）年であり、経済的独立が戦後にまでもちこされた人が、少なくとも4分の1はいたことになる（表3-10）。

3.1.6 親への経済的・非経済的援助

本調査では、親への経済的・非経済的援助は、本人が親からの経済的独立を果たしたあとに行うもののみをたずねたので、本項の数値は、経済的独立の経験者を母数としている。ここで、非経済的援助とは、代理の買い物、介護、重要な事の相談などを含む。

まず、親への経済的援助は、表3-11からわかるように、男性の方が女性に比べて援助率が高い。おそらく、女性は経済的独立を果たした女性のほとんどは既婚で、すでに離家をしているために、男性に比べて援助率が低いのだろう。経済的援助の経験年齢は、各コーホートともにばらつきがみられ、特に女性の四分位範囲（QR）が大きく、C-Ⅱ女性では27.9となっている（表3-12）。

表3-11　親への経済的援助有無

		あり	未経験	非経験	N (100%)
男	C-Ⅰ	53.8	-	43.6	39
	C-Ⅱ	45.6	8.8	45.6	57
女	C-Ⅰ	28.3	-	67.9	53
	C-Ⅱ	33.3	9.3	57.4	54

表3-12　親への経済的援助年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	20	15.5	19.5	23.5	8.0
	C-Ⅱ	31	18.6	22.3	27.8	9.2
女	C-Ⅰ	15	15.3	16.4	27.8	12.5
	C-Ⅱ	23	15.9	20.8	43.8	27.9

つぎに、非経済的援助経験率をみてみると、C-Ⅰに比べてC-Ⅱの非経済的援助率が高い。とくに、C-Ⅱ女性が目立つ（表3-13）。これには、おそらく親の死亡時機と関係があるだろう。

実際、援助開始年齢をみると、経済独立年齢よりも高い（表3-14）。あとでみるように、C-ⅠよりもC-Ⅱのほうが、親の死亡を遅く経験しているのである。つまり、C-Ⅰに比べ

表3-13　親への非経済的援助有無

		あり	未経験	非経験	N (100%)
男	C-Ⅰ	35.9	-	61.5	39
	C-Ⅱ	42.1	5.3	50.9	57
女	C-Ⅰ	26.4	-	67.9	53
	C-Ⅱ	53.7	3.7	40.7	54

て、C-Ⅱのほうが、非経済的な援助を行うまで親が生き延びた人が多かったということだろう。

表3-14　親への非経済的援助年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	13	20.6	28.0	31.4	10.8
	C-Ⅱ	27	19.4	23.4	31.8	12.4
女	C-Ⅰ	14	19.7	21.5	31.0	11.3
	C-Ⅱ	31	19.4	26.0	43.8	24.4

3.1.7　結婚後の親との同居

ここでいう親とは、対象者本人と配偶者の親の両方を含む。対象者が結婚後、本人、あるいは配偶者の親と同居したことがある人の割合は、C-Ⅰ男性が42.8%（21人）、女性が55.4%（31人）、C-Ⅱ男性が56.0%（37人）、女性が63.2%（36人）となっており、C-Ⅰに比べ、C-Ⅱが経験率が高くなっている（表3-15）。どちらの親と同居したかについては、男性は、いずれも自分の親との同居経験者が多く、C-Ⅰが85.7%（18人）、C-Ⅱが89.2%（33人）となっている。逆に、女性は、配偶者の親との同居経験者が多く、C-Ⅰが83.9%（26人）、C-Ⅱが86.1%（30人）となっており、これはある程度予想された結果であった（表省略）。同居経験回数は、1回がほとんどであり、2回以上経験した人は、各コーホートで1人ないし2人いるだけである（表省略）。

表3-15　結婚後の親との同居経験の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	42.8	57.2	49
	C-Ⅱ	56.0	44.0	66
女	C-Ⅰ	55.4	44.6	55
	C-Ⅱ	63.2	36.2	57

表3-16は、結婚後の親との同居開始年齢を、初回の同居に限定して示してある。中央値をみると、女性の方が男性に比べて若くなっており、おそらく結婚後間もなく同居を経験したケースが多いと思われる。

表3-16　親との同居経験年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	21	20.8	27.0	30.4	9.6
	C-Ⅱ	37	21.8	23.7	35.3	13.5
女	C-Ⅰ	31	18.3	19.4	22.6	4.3
	C-Ⅱ	35	19.8	21.4	24.2	4.4

3.1.8　子ども役割の喪失

まず、調査時点での親の有無について表3-17でみると、ほとんどすべての対象者が両親の死亡を経験している。父親が生存している対象者がC-Ⅱ男性に1人いた。母親が生存している対象者は、C-Ⅱの男性が9.6%（6人）、C-Ⅱの女性が11.9%（11人）となっており、母親の生存率が、父親のそれよりも高い。

表3-17　親の存否

		父親健在	父親死亡	母親健在	母親死亡	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	-	100.0	-	100.0	-	49
	C-Ⅱ	1.5	98.5	9.6	89.4	1.5	66
女	C-Ⅰ	-	100.0	-	100.0	-	56
	C-Ⅱ	-	100.0	11.9	88.1	-	59

つぎに、子ども役割の喪失をもたらす親の死亡時機を、父親、母親の順にみていく。表3-18で父親の死亡時の対象者の年齢をみると、次の２つの傾向が見いだせる。すなわち、C-Ⅰに比べて、C-Ⅱが父親の死亡を経験する年齢が若いこと、そして、C-Ⅰ男性の四分位範囲（QR）がほかよりも小さい、つまり経験の幅が集中していることである。これらの傾向がもたらされている原因は、戦争にあると考えられる。そこで、父親の死亡経験年をみよう（表3-19）。

表3-18　父死亡時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	42	18.8	28.1	34.0	15.2
	C-Ⅱ	63	17.1	22.0	44.8	27.7
女	C-Ⅰ	50	20.0	29.3	45.0	25.0
	C-Ⅱ	50	17.2	24.5	46.0	28.8

表3-19　父死亡年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	42	1934.0	1944.8	1948.0	14.0
	C-Ⅱ	63	1944.6	1947.3	1970.8	26.2
女	C-Ⅰ	50	1936.0	1945.1	1962.0	26.0
	C-Ⅱ	50	1944.3	1950.5	1973.7	29.4

C-Ⅱは、男女とも、第１四分位数が1944（昭和19）年で、これを中央値と考え合わせると、このコーホートの少なくとも4分の1が、戦争期に父親を亡くしているといえる。それに比べると、C-Ⅰのばあいは、約半数は戦争が激しくなる前に、すでに父親が死んでいたことになる。このことが、C-ⅡがC-Ⅰよりも父親を亡くした年齢が

低いことの一因であろう。

一方、C-Ⅰの男性は、第3四分位数をみるとわかるように、さきにみた戦争が激しくなる以前に父親が死んでいた半数の人をのぞいて、全体の4分の1が戦争中から戦争直後に父親を亡くしている。このことが、C-Ⅰ男性の四分位範囲（QR）がほかよりも小さかったことを説明するだろう。ただし、次にみる母親の死亡時機には、このような傾向がないので、一概に戦争のためだけとはいいきれない。今後、親自身の死亡年齢もみてみる必要があろう（表3-19）。

つぎに、表3-20の母親の死亡時年齢をみてみよう。こんどは逆に、男女ともC-Ⅰの母親の死亡を経験する年齢がC-Ⅱよりも若くなっている。各コーホートの母親死亡時年齢の中央値は、C-Ⅰの男性が29.3歳、女性が31.5歳、C-Ⅱの男性が47.5歳、女性が51.2歳となっている。ここで考えられることは、父親の死亡のばあいとは異なり、C-Ⅰにおいて、母親の死亡に沖縄戦が関連しているのではないかということである。C-Ⅰの中央値が男女ともに1945（昭和20）年であり、母親の死亡は戦争が一因であることがうかがわれる。これに対して、C-Ⅱには、戦争中の死亡も含まれているが、それでも半数以上は、戦後まで生き延びたのである（表3-21）。

表3-20　母死亡時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	40	26.5	29.3	51.5	25.0
	C-Ⅱ	58	19.6	47.5	62.0	42.4
女	C-Ⅰ	50	27.3	31.5	56.0	28.7
	C-Ⅱ	54	28.0	51.2	61.0	33.0

表3-21　母死亡年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	40	1940.5	1945.2	1966.5	26.0
	C-Ⅱ	58	1945.1	1974.5	1989.3	44.2
女	C-Ⅰ	50	1944.6	1945.5	1974.0	29.4
	C-Ⅱ	54	1955.3	1976.5	1986.3	31.0

さて、こんどは、父と母のどちらを先に亡くすか、すなわち、子ども役割の喪失順序をみよう。どのコーホートも、父親が母親よりも先に死亡している割合が高い（表3-22）。ただ、ここで注目しておきた

表3-22　親の喪失（死亡）順序

		父親先死亡	母親先死亡	両親同年死亡	N (100%)
男	C-Ⅰ	48.6	29.7	21.6	37
	C-Ⅱ	56.9	31.4	11.8	51
女	C-Ⅰ	56.5	21.7	21.7	46
	C-Ⅱ	68.3	17.1	14.6	41

いのは、親の同年の死亡についてである。さきの父、母それぞれの死亡時機でみたように、ここにも戦争の影響があるだろう。実際にデータをみてみればそのことがはっきりしてくる。1945（昭和20）年に両親が死亡している対象者は全体のうち23人いるのに対して、1944年に両親が死亡している対象者は1人、1946年に両親が死亡している対象者は2人しかいなかった。コーホート別では、1945（昭和20）年の沖縄戦で、両親を同時に亡くした人は、C-Ⅰに約2割、C-Ⅱに1.5割いたのである。親の死亡時機に対する、戦争の影響の差異については、今後もっと分析を進める必要があろう。

3.1.9　孫役割の喪失

まず、対象者が生まれたときに、祖父母が生存していたかどうかについてみておこう（表3-23）。ここで目立つことは、出生時の祖父母の生死さえわからないと答えた人が多いことである。そして、父方祖父、祖母の死亡時機を不明と答えた人は、母方祖父、祖母の死亡時機を不明と答えた人よりも少なくなっ

表3-23　祖父母生死

			祖父				祖母			
			誕生前に死亡	誕生後に死亡	不明	N (100%)	誕生前に死亡	誕生後に	不明	N (100%)
父方	男	C-Ⅰ	46.9	38.8	14.3	49	59.2	28.6	12.2	49
		C-Ⅱ	48.5	42.4	9.1	66	62.1	28.8	9.1	66
	女	C-Ⅰ	48.2	41.1	10.7	56	51.8	39.3	8.9	56
		C-Ⅱ	40.7	54.2	5.1	59	55.9	37.3	6.8	59
母方	男	C-Ⅰ	36.7	40.8	22.4	49	42.9	36.7	20.4	49
		C-Ⅱ	47.0	33.3	19.7	66	56.1	25.8	16.7	66
	女	C-Ⅰ	41.1	41.1	17.9	56	53.6	26.8	19.6	56
		C-Ⅱ	45.8	39.0	15.3	59	50.8	33.9	15.3	59

表3-24　出生時に生存していた祖父母数

		0人	1人	2人	3人	4人	平均(人)	N (100%)
男	C-Ⅰ	25.0	13.9	8.3	30.6	22.2	2.1	36
	C-Ⅱ	14.0	16.0	16.0	26.0	28.0	2.4	50
女	C-Ⅰ	19.0	19.0	16.7	16.7	28.6	2.2	42
	C-Ⅱ	14.9	21.3	21.3	21.3	21.3	2.1	47

ている。また、C-ⅠよりもC-Ⅱのほうが不明と答えた人の割合は少なくなっている。ここでいえることは、父方の祖父母のほうが母方のそれよりも、認知度が高いということである。このことはおそらく、沖縄の家族・親族が父系を軸に組織化されるという、家族制度のあり方と関連があるのかもしれない。出生時に生存していた祖父母数の平均は、表3-24からもわかるように、男女間、コーホート間において、それほど差はみられない。

つぎに、祖父母の死亡時の本人の年齢をみてみると（表3-25）、男女ともに、おしなべてC-Ⅰの方がC-Ⅱに比べて、経験年齢が高くなっている。このことは、とりわけ祖父よりも祖母についてあてはまる。一般に、日本人の平均寿命の伸長を考慮に入れれば、コーホートが若くなるほど、祖父母の死亡経験年齢は高くなると考えられる。しかし、今回の調査では、２つのコーホートにかんする限り、若いコーホートの方が早い時期に祖父母を亡くしている。これには、戦争による直接、間接的な影響によるものが考えられる。そこで、祖父母の死亡年次をみると（表3-26）、C-Ⅰ男性の父方祖父およびC-Ⅰ女性の母方祖父をのぞいて、中央値および第３四分位数が終戦の年である1945（昭和20）年に近くなっている。ここでもやはり、祖父よりも祖母に傾向が顕著である。祖母にかんしては、コーホートの違い、すなわち出生年にかかわりなく、戦争期に祖母を亡くしている。このことが、経験年齢において、C-ⅡがC-Ⅰよりも低い主な原因と考えられる。この傾向は、とくに、祖父よりも祖母のほうに、また父方よりも母方のほうに著しい。後者は、おそらく両親の年齢差に起因するものであろう。そして、これらを対象者の出生年代と重ね合わせると、C-Ⅰの祖父の

表3-25　祖父母死亡時本人年齢

			祖父					祖母				
			Q1	Med.	Q3	QR	N	Q1	Med.	Q3	QR	N
父方	男	C-Ⅰ	6.8	15.8	19.4	12.6	17	8.8	19.0	28.3	19.5	21
		C-Ⅱ	4.5	14.8	17.8	13.3	32	13.3	17.4	22.8	9.5	35
	女	C-Ⅰ	5.5	16.5	26.5	21.0	16	14.5	27.5	28.5	14.0	16
		C-Ⅱ	5.5	12.5	18.5	13.0	20	8.0	18.5	21.3	13.3	26
母方	男	C-Ⅰ	21.8	25.8	27.3	5.5	9	11.6	23.0	28.9	17.3	13
		C-Ⅱ	10.3	17.2	18.9	8.6	23	11.8	17.4	20.3	8.5	30
	女	C-Ⅰ	9.3	14.8	21.8	12.5	11	11.0	22.0	25.0	14.0	14
		C-Ⅱ	11.8	16.5	18.3	6.5	18	16.7	17.8	20.5	3.8	21

大部分は、戦争が激しくなる前にすでに死亡しており、同じコーホートの祖母、およびC-Ⅱの祖父母の多くは、おそらく、戦争による直接的、間接的な原因（終戦直後の医療の不備や栄養状態、衛生状態の悪さ）で亡くなったと考えられよう。

表3-26　祖父母死亡年

			祖父					祖母				
			Q1	Med.	Q3	QR	N	Q1	Med.	Q3	QR	N
父方	男	C-Ⅰ	1924.8	1931.0	1934.8	10.0	17	1924.8	1934.3	1944.8	20.0	21
		C-Ⅱ	1930.5	1939.5	1944.9	14.4	32	1944.3	1944.9	1949.8	9.5	35
	女	C-Ⅰ	1921.5	1930.5	1944.0	22.5	16	1930.0	1944.5	1945.2	15.2	16
		C-Ⅱ	1933.5	1937.5	1945.3	11.8	20	1934.8	1944.8	1946.0	11.2	26
母方	男	C-Ⅰ	1936.8	1940.8	1944.3	7.5	9	1926.8	1937.0	1945.1	18.3	13
		C-Ⅱ	1934.4	1944.7	1945.2	10.8	23	1937.0	1944.7	1945.3	8.3	30
	女	C-Ⅰ	1926.9	1931.0	1936.1	9.2	11	1927.0	1937.0	1942.0	15.0	14
		C-Ⅱ	1938.8	1943.0	1944.8	6.0	18	1942.8	1944.9	1945.4	2.6	21

3.1.10 きょうだいの死亡

きょうだいの死亡経験率は、年長のC-ⅠがC-Ⅱよりも高くなることが予想されるが、表3-27をみると、実際には、C-Ⅰ男性が93.4%、女性が89.3%となっている。これに対して、C-Ⅱの経験率は男性が81.8%、女性の経験率が72.9%であった。

表3-27　きょうだいの死亡経験有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	93.4	6.1	49
	C-Ⅱ	81.8	18.2	66
女	C-Ⅰ	89.3	10.7	56
	C-Ⅱ	72.9	27.1	59

きょうだいを初めて亡くしたときの年齢を表3-28でみると、男女ともコーホート間の中央値の差が8～10年と、かなりある。また、四分位範囲（QR）は、C-ⅠはC-Ⅱに比べて小さく、経験の幅が集中していることを示している。ちなみに、C-Ⅱの女性は、第３四分位数と四分位範囲（QR）が空白になっているが、これは、まだきょうだいの死亡を経験したことがない人が4分の1以上いるためである。

さて、ここでもやはり、戦争などできょうだいを失ったかそうでないかで経験年齢に開きが生じてくるのではないかと考えられる。そこで、きょうだいの死亡年をみると、このことはもっとはっきりしてくる（表3-29）。中央値は、どちらのコーホートも、1945（昭和20）年前後であり、さらに、C-Ⅰの第３四分位数も戦争直後であることがわかる。これらから、C-Ⅰの人びとは、戦争中かその直後に初めてきょうだいを亡くした経験をもつ人が、4分の1以上はいたことになる。また、C-Ⅰ全体の4分の3は、戦争の時期までに初めてのきょうだいの死亡を経験したのである。

表3-28　きょうだい死亡時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	43	13.4	27.3	30.8	17.4
	C-Ⅱ	60	16.6	18.5	49.5	32.9
女	C-Ⅰ	48	19.3	28.1	31.5	12.2
	C-Ⅱ	54	16.6	20.5	-	-

表3-29　きょうだい死亡年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	43	1929.4	1944.0	1945.4	16.0
	C-Ⅱ	60	1943.8	1945.0	1974.5	30.7
女	C-Ⅰ	48	1935.2	1944.9	1947.5	12.3
	C-Ⅱ	54	1943.0	1945.3	-	-

ところで、C-Ⅱには、こうした戦争の影響がみられないかというと、決してそうではない。それは、経験年の第１四分位数が1943（昭和17）年で、終戦の年に近い値であることから、このコーホートのばあいも、少なくとも4分の1は、戦争中に初めてのきょうだいの死亡を経験したのである。

このように、いずれのコーホートも、きょうだいの死亡という出来事への戦争の影響が色濃くみられたが、しかし、２つのコーホートは出生年が異なるために、人生上での経験時機が異なったものとなったのである。

3.2 夫婦役割の獲得と変容

本書では、結婚に始まり配偶者との離死別によって終了する、結婚生活上の夫役割もしくは妻役割を総称して夫婦役割とよんでいる。本節では、まず夫婦役割の取得にかんして結婚の有無及び時機、配偶者との年齢差、結婚時機の主観的評価を、夫婦役割の取得までの経過として結婚の形態、相手と知り合ったきっかけを、さらに、夫婦役割の変容と喪失として再婚・離死別・別居経験の有無を通してみていく。なお、本節における結婚とは原則として初婚に限定し

た。

3.2.1　夫婦役割の取得

すでに対象者のプロフィールでみたように、結婚経験の有無については、男性は、C-Ⅰ・C-Ⅱともに、対象者全員に結婚経験があった。女性も、C-Ⅰで98.2%、C-Ⅱで99.6%が経験し、C-Ⅰ女性・C-Ⅱ女性それぞれ1人ずつ結婚経験がない以外は、全員が結婚を経験していた。

初婚年齢を表3-30でみてみると、C-ⅠでもC-Ⅱでも、男性は女性より結婚が遅い。またコーホート間では、男性に差異がみられ、C-Ⅰの方がC-Ⅱより晩婚である。中央値ではさほど差がないが、第3四分位数では目立つ。女性はC-ⅠよりC-Ⅱが遅いといえるものの、そのわずかな違いをもって差異があるとはいいがたい。また、初婚年にかんしては、表3-31のとおりに、C-Ⅰ男性の第3四分位数までの人たちが、終戦の1945(昭和20)年までに結婚をしていることにも注目しておきたい。

表3-30　初婚年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	49	21.3	24.7	28.7	7.4
	C-Ⅱ	66	20.4	23.3	25.7	5.3
女	C-Ⅰ	55	18.7	20.3	22.5	3.8
	C-Ⅱ	59	19.6	20.9	22.8	3.2

表3-31　初婚年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	49	1938.0	1940.9	1944.9	6.9
	C-Ⅱ	66	1947.1	1949.8	1951.8	4.7
女	C-Ⅰ	55	1934.7	1936.3	1938.6	3.9
	C-Ⅱ	59	1946.0	1947.4	1948.7	2.7

夫婦の年齢差を、夫の年齢から妻のをれを引いた差の平均値からみると、男性は、C-Ⅰが3.6歳、C-Ⅱが2.5歳、女性は、C-Ⅰが1.9歳、C-Ⅱが3.3歳で、どのコーホートも夫のほうが妻よりも年上であった。

自分の結婚が同年代の人たちと比べて早かったと考えているか、それとも遅かったと考えているか、すなわち、初婚時機の主

表3-32　初婚時機の評価

		早い方	普通	遅い方	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	20.4	22.4	49.0	8.1	49
	C-Ⅱ	34.8	34.8	28.8	1.5	66
女	C-Ⅰ	30.9	30.9	23.6	14.5	55
	C-Ⅱ	36.2	39.7	19.0	5.2	58

観的評価についてきいたところ、表3-32に表れているように、「早いほう」と答えたのはC-Ⅰ男性で20.4%、C-Ⅱ男性で34.8%、C-Ⅰ女性で30.9%、C-Ⅱ女性で36.2%と、中でもC-Ⅰ男性が特に低い。逆に「遅いほう」と答えたのはC-Ⅰ男性の49.0%が最も高くなっている。C-Ⅰ男性に遅い方という回答が多いのは、すでにみたように（表3-30）、実際の初婚の遅さを考えれば当然とも考えられる。また、C-Ⅰは男性・女性ともに「普通」と答えた率がC-Ⅱよりも低いことから婚期が人よりずれてしまったと考えている人がC-Ⅱよりも多いといえよう。

3.2.2 夫婦役割獲得までの経緯

つぎに、夫婦役割獲得までの経緯として、初婚の形態ときっかけをみていこう。形態は、表3-33が示すように、C-Ⅰ男性、C-Ⅱ男性のそれぞれ61.2%、51.5%が「見合い・紹介婚」であると答えたのに対し、C-Ⅰ女性、C-Ⅱ女性はそれぞれ72.7%、72.4%であり、女性はどちらのコーホートも、見合い・紹介婚であったとする率が高い。コーホート間で比較したばあい、男性ではC-Ⅰの方がC-Ⅱより紹介婚の割合が多く違いが表れるが、女性には違いはみられない。

表3-33　初婚の形態

		見合・紹介	恋愛	その他	N (100%)
男	C−Ⅰ	61.2	36.7	2.0	49
	C−Ⅱ	51.5	43.9	4.5	66
女	C−Ⅰ	72.7	27.3	-	55
	C−Ⅱ	72.4	27.6	-	58

結婚の相手と出会ったきっかけを、人からの紹介・紹介以外というように大きく2つに分けてみてみると興味深い結果が得られる。表3-34にあるように、男性は、C-Ⅰ・C-Ⅱとも、紹介によるものを合わせると、それぞれ59.2%、56.1%であるのに対し、女性のそれは、C-Ⅰは78.2%、C-Ⅱは69.0%で、女性の方が男性よりも、人からの紹介によると答えている率が多く、男女間でズレが生じているのがからわかる。つまり、結婚の形態と対応するように、結婚相手と知り合うきっかけにかんしても、女性の方が男性に比して、結婚の際に周囲の人々の世話になっている考えていることがわかる。

表3-34　相手と出会ったきっかけ

		紹介によるもの			紹介以外		その他	N (100%)
		家族	親族	他	元から	出会い		
男	C－Ⅰ	36.7	18.4	4.1	26.5	6.1	8.2	49
	C－Ⅱ	25.8	25.8	4.5	27.3	9.0	7.6	66
女	C－Ⅰ	40.0	30.9	7.3	7.3	7.3	7.3	55
	C－Ⅱ	41.4	20.7	6.9	17.2	6.9	6.9	58

注：表中のカテゴリーは、それぞれ以下のものを含む。
「家族」の紹介…親・きょうだい
「他」からの紹介…教師、同級生、上司、同僚、近所の人
「元から」…もともと知っていた
「出会い」…学校、職場、グループ・サークルで

3.2.3　夫婦役割の変容と喪失

ここでは、離婚・配偶者との死別など、夫婦役割を終了あるいは中断させる出来事についてみていく。その前に、夫婦の別居経験についてみておこう。ここでいう別居とは、出征、出稼ぎや長期入院などの理由で夫婦が１年以上やむなく別々に暮らすことをいう。もちろん、夫婦仲が悪くなって別居することも含む。表3-35に示したように、C-Ⅰ男性が36.7%、C-Ⅰ女性が52.7%であるなのに対し、C-Ⅱ男性が16.7%、C-Ⅱ女性が19%と、男女ともにC-ⅠがC-Ⅱよりも高く、C-Ⅰでも特に女性の別居経験率が高い。おそらく夫の兵役経験が関係していると思われる。

表3-35　別居経験

		あり	なし	不明	N (100%)
男	C－Ⅰ	36.7	63.3	-	49
	C－Ⅱ	16.7	81.8	1.5	66
女	C－Ⅰ	52.7	47.3	-	55
	C－Ⅱ	19.0	81.0	-	58

離婚経験率にかんしては、表3-36のとおり、C-Ⅰ男性が8.2%、C-Ⅱ男性が6.1% C-Ⅰ女性が7.3%、C-Ⅱ女性が5.2%で、コーホート差、男女差ともにほとんどみられなかった。

表3-36　離婚経験

		あり	なし	N (100%)
男	C－Ⅰ	8.2	91.8	49
	C－Ⅱ	6.1	93.9	66
女	C－Ⅰ	7.3	92.7	55
	C－Ⅱ	5.2	94.8	58

しかし、配偶者との死別経験にかんしては、表3-37によると、C-Ⅰ男性で20.4%、C-Ⅱ男性が9.1%、C-Ⅰ女性は72.7%、C-Ⅱ女性は22.4%と、C-Ⅰ女性だけが飛びぬけて高いことを表している。死別年をみると、まず1945（昭和20）年までに、つまり終戦間近の激戦の年までにC-Ⅰ女性の配偶者の25%、特に1945年には、実数にして死亡者41人中13人が亡くなっている。このことがC-Ⅰ女性の死別経験率を引き上げている。またC-Ⅰ男性の配偶者の死別にかんしても11人中３人が45年に亡くなっており、男女ともに戦争による死別が多いと考えてよいだろう。一方、戦争の時期をのぞけば、C-Ⅰ女性の死別経験が多いのは、女性よりも男性の寿命が短いうえに配偶者である男性が年上であるからであると考えられる。

表3-37　死別経験

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	22.4	77.6	49
	C-Ⅱ	9.1	90.9	66
女	C-Ⅰ	74.5	25.5	55
	C-Ⅱ	24.1	75.9	58

表3-38　再婚経験（離死別経験者のみ）

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	80.0	20.0	15
	C-Ⅱ	33.3	66.7	9
女	C-Ⅰ	18.6	81.4	43
	C-Ⅱ	18.8	81.3	16

では、再婚の経験はどうかを、離死別経験者のみについて、表3-38でみると、C-Ⅰ男性のうち、8割は再婚しているが、女性は、どちらのコーホートも2割に満たない。とくに、C-Ⅰ女性は、死別経験の比率の高さと比較して再婚経験が少ない。女性は男性に比べて、再婚がむずかしかったのかもしれない。

3.3 親役割の取得と変容

ここでは、親役割の取得とその変容の時機についてみていく。いうまでもなく、親役割は、子どもをもつことにより取得され、一般的には自分が死亡するまで継続する。しかし、その内容は、親・子ども双方の加齢の経過とともに変化する。すなわち、子どもが成人するまでは、親が子どもを保護・扶養する立場にあるが、子どもが成長するにつれて、その意味合いは減少し、さらに、親が高年期に入ると、こんどは反対に子どもから保護・扶養を受ける立場へと変化していく。このような変容過程をみるために、ここでは、子どもの出生に加えて、子どもの成人期への移行を形づくる出来事となる、子どもの経済的独立、

学業終了、結婚、そして結婚した子どもとの同居、子どもからの経済的・非経済的援助の開始などについて、その経験時機を中心にみていく。

3.3.1 親役割（子ども）の取得

最初に、個人が親役割を取得するきっかけとなる子どもの出生という出来事からとりあげる。子どもをもったことのある人はC-Ⅰ・C-Ⅱの男女とも90%を超えている（表3-39）。子どもの出生人数の平均では、C-Ⅰの男性が6.1人なのに対して、C-Ⅱの男性は4.7人である。女性はどちらのコーホートも4.8人である（表3-40）。これを対象者本人のきょうだい数と比較してみると、すでにみたように、C-Ⅰの男性の平均が5.8人、女性は5.7人、C-Ⅱの男性では6.0人、女性は6.2人となっており、C-Ⅰ男性を別にすれば、きょうだい数よりも自分の子どもの数のほうが若干ではあるが少なくなっている。また、一番多い子どもの数は11人だった。

表3-39　子の出生の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	98.0	2.0	49
	C-Ⅱ	97.0	3.0	66
女	C-Ⅰ	100.0	-	56
	C-Ⅱ	96.6	3.4	59

表3-40　子どもの人数ときょうだい人数

		子ども人数	きょうだい人数
男	C-Ⅰ	6.1	5.8
	C-Ⅱ	4.7	6.0
女	C-Ⅰ	4.8	5.7
	C-Ⅱ	4.8	6.2

子どもをもった時機（年齢）を、第一子と末子についてみよう。第一子出生年齢は、中央値が、C-Ⅰの男性では26.3歳で、女性では21.9歳、C-Ⅱの男性では24.7歳、女性では22.3歳である。男女間の差異の傾向は先に述

表3-41　最初に子どもをもった年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	48	23.5	26.3	30.3	6.8
	C-Ⅱ	66	22.4	24.7	27.9	5.5
女	C-Ⅰ	56	20.0	21.9	24.1	4.1
	C-Ⅱ	59	21.0	22.3	23.8	2.8

表3-42　最後に子どもをもった年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	45	39.0	41.1	45.1	6.1
	C-Ⅱ	64	32.1	34.4	36.5	4.4
女	C-Ⅰ	53	27.8	34.0	40.2	12.4
	C-Ⅱ	57	29.9	32.7	35.5	5.6

べた初婚年齢に似ている（表3-41）。

末子をもった年齢をみてみる。表3-42からわかるように、C－Ⅰの男性で41.1歳、女性では34.0歳、C－Ⅱの男性では34.4歳、女性では32.7歳である。

子どもをもった年次を、第一子と末子の出生年の中央値からみると、C－Ⅰの男性では、1943（昭和18）～1957（昭和32）年の間に、同じく女性では1938（昭和13）～1950（昭和25）年に、C－Ⅱの男性では1950（昭和25）～1960（昭和35）年の間に、同じく女性では1948（昭和23）～1959（昭和34）年の間に、ほぼ半数の人が子どもをもったことになる。

子どもを亡くした経験は、C－Ⅰの男性では43.8%、女性では51.8%、C－Ⅱの男性では23.4%、女性では21.1%の人にあった。全体的にC－ⅡよりC－Ⅰに経験者が多い（表3-43）。

表3-43　子死亡経験有無

		あり	なし	不明
男	C－Ⅰ	43.8	56.3	-
	C－Ⅱ	23.4	75.0	1.6
女	C－Ⅰ	51.8	48.2	-
	C－Ⅱ	21.1	78.9	-

初めて子どもを亡くした時機については、四分位数を算出できるだけの該当者数がないので表は省略するが、経験年次では、C－Ⅱは、ほとんど全員が戦後であった。これに対して、C－Ⅰは、男女とも、終戦の年かあるいはその直後に経験した人の率が多かった。1945（昭和20）年に初めて子どもを亡くした人の比率をあげると、男性は、該当者21人中6人（28.6%）、女性は、同じく29人中12人（41.4%）であった。これに、1948（昭和23）年までの経験を加えると、男性は57.2%、女性は51.7%と、実に半数以上の人が、沖縄戦の年から戦後の混乱期にかけて、初めての子どもの死亡を経験していたのである。

3.3.2　子どもの学業終了

これよりさきは、子どもの自立過程に関連する出来事経験をみていこう。本項で子どもの学業終了を、次項で子どもの結婚をとりあげる。

子どもの学業終了は、「不明」、「非該当」（学業を終える前に子どもが死亡したばあい）をのぞいて、C－Ⅰ、C－Ⅱの男女ともほとんど全員が経験している。

子どもの卒業を初めて経験した年齢は、中央値でみると、C－Ⅰの男性で45.8歳、女性で39.4歳、C－Ⅱの男性では45.1歳、女性は41.3歳である。C－Ⅰ・C－Ⅱの女性に若干の差があるくらいである（表3-44）。また、子どもがすべて卒業した年齢は、同じく中央値で、C－Ⅰの男性で60.1歳、女性で55.8歳、C－Ⅱの男性では54.1歳、女性は52.1歳となっており、C－Ⅰ男性がほかよりも高くなっている（表3-45）。

表3-44　子どもの最初の学業終了時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C－Ⅰ	46	40.8	45.8	51.3	10.5
	C－Ⅱ	63	41.9	45.1	47.9	6.0
女	C－Ⅰ	53	37.0	39.4	42.7	5.7
	C－Ⅱ	57	39.2	41.3	43.9	4.7

表3-45　子どもの最後の学業終了時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C－Ⅰ	45	57.3	60.1	63.7	6.4
	C－Ⅱ	62	51.6	54.1	57.9	6.3
女	C－Ⅰ	53	43.6	55.8	59.4	15.8
	C－Ⅱ	55	49.1	52.1	56.0	6.9

3.3.3　子どもの結婚

つぎに子どもの結婚についてみよう。結婚した子どもがいる人は、C－Ⅰの男性で95.8%、女性で98.2%であり、C－Ⅱの男性では98.4%、女性では100.0 %と、ほとんどの人が子どもの結婚を経験していた。

子どもの結婚を初めて経験した年齢は、中央値で、C－Ⅰの男性で54.7歳、女性で49.3歳、C－Ⅱの男性で49.3歳、女性で47.0歳である（表3-46）。

すべての子どもが結婚を終了した対象者は、C－Ⅰの男性では64.6%、女性では85.5%、C－Ⅱの男性では40.6%、女性では50.9%であった。

その年齢を中央値でみると（表3-47）、C－Ⅰの男性で69.3歳、女性で64.3歳、C－Ⅱの女性は68.0歳であった。C－Ⅱの男性は、経験者が50%に満たないため、

表3-46　子どもの最初の結婚時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C－Ⅰ	43	50.8	54.7	57.8	7.0
	C－Ⅱ	63	46.6	49.3	54.9	8.3
女	C－Ⅰ	52	44.7	47.9	52.8	8.1
	C－Ⅱ	55	44.1	47.0	50.3	6.2

表3-47　子どもの最後の結婚時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C－Ⅰ	45	64.6	69.3	-	-
	C－Ⅱ	64	62.8	-	-	-
女	C－Ⅰ	54	53.3	64.3	71.0	17.7
	C－Ⅱ	57	56.6	68.0	-	-

中央値は算出できない。女性のみに限ってみれば、子どもの結婚終了は遅くなっている。ただし、これが子どもの晩婚化のせいであるのかは、子ども自身の結婚年齢をみなければわからない。残念ながら、本調査では、子どもの結婚年齢は質問項目に含めることはできなかった。

3.3.4 既婚子との同居

親役割の変容もたらす重要な出来事の一つと考えられる、既婚子との同居についてみよう。まず、経験率では、C－Ⅰの男性で 46.8%、女性で 61.8%、C－Ⅱの男性で 31.7%、女性で 45.5%が経験している。全体的にみて、女性より男性の方が経験者が少ない（表3-48）。なぜそうなのかを説明する資料をわれわれはもちあわせていないが、おそらく既婚子との同居は配偶者との死別がきっかけで開始されることが多く、一般に女性のほうが男性よりも早く配偶者を亡くすためであるかもしれない。同居回数は、各コーホートとも１回の割合が断然多かった。C－Ⅱの女性に１人だけ３回経験者がいた。

表3-48　既婚子との同居有無

		あり	なし	N (100%)
男	C－Ⅰ	46.8	53.2	47
	C－Ⅱ	31.7	68.3	63
女	C－Ⅰ	61.8	38.2	55
	C－Ⅱ	45.5	54.5	55

同居した子どもの続柄を、１回目の同居について、長男か否かに分類すると（表3-49）、男性と女性で違いがあらわれる。男性は各コーホートとも、長男が 80%以上を占めるのに対して、女性では、C－Ⅰが 67.6%、C－Ⅱが 68.0%と長男と同居する率が落ちている。かわりに、長男以外と同居する率が、C－Ⅱの男性で 32.3%、女性で 32.0%となっており、C－Ⅰの男性 18.2%、女性 20.0%と比較してかなり高くなっている。この理由について知るのは、今後の課題である。

表3-49　同居既婚子の続柄

		長男	それ以外	N (100%)
男	C－Ⅰ	81.8	18.2	22
	C－Ⅱ	80.0	20.0	20
女	C－Ⅰ	67.6	32.3	34
	C－Ⅱ	68.0	32.0	25

3.3.5　子どもからの経済的・非経済的援助

対象者から親への援助についてはすでにみたが、そのばあいと同様に、子どもからの対象者への援助についても、子どもの経済的独立を前提としている。対象者のほとんど全員が、子どもの経済的独立をすでに経験している。ただ、その時機は、対象者にとって特定しにくいことが予想されたので、今回は質問項目に含めなかった。

さて、子どもからの経済的な援助を受けたことがあるかどうかをみると、C-Ⅰの男性で 16.7%、女性で 30.9%、C-Ⅱの男性では 12.5%、女性で 26.8%が経験している。男性と女性を比較すると女性の方が経験率が高い。理由はこの調査からはわからないが、配偶者との死別が考えられる。また、出生年の違いにもかかわらず、C-Ⅰの男性は、C-Ⅱ男性に比べて経験率が低い（表3-50）。

表3-50　子どもからの経済的援助経験の有無

		あり	なし	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	16.7	83.3	-	48
	C-Ⅱ	12.5	85.9	1.6	64
女	C-Ⅰ	30.9	69.1	-	55
	C-Ⅱ	26.8	67.9	5.4	56

経済的以外の援助を受けた経験は、C-Ⅰの男性で 50.0%、女性で 43.6%、C-Ⅱの男性では 42.2%、女性では 50.0%で約半数の人にあった。経済的援助に比べると受ける率が高い（表3-51）。経済的援助を受けた経験よりは、非経済的援助を受けた経験をもつ人の方が各コーホートとも多かった。

表3-51　子どもからの非経済的援助経験の有無

		あり	なし	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	50.0	50.0	-	48
	C-Ⅱ	42.2	57.8	-	64
女	C-Ⅰ	43.6	56.4	-	55
	C-Ⅱ	50.0	44.6	5.4	56

3.3.6　祖父母役割の取得

最後に、孫の有無、すなわち祖父母役割の保有の有無についてみておこう。対象者のほとんど全員が、すでに孫をもっている。

初孫が生まれたときの対象者の年齢は、中央値でみるとC-Ⅰの男性で 56.5 歳、女性で 51.0 歳、 C-Ⅱの男性では 50.7 歳、女性では 49.4 歳である。C-

Ⅰの男性が他のコーホートと比べて経験が遅いが、あとはそれ程差はない（表3-52）。

表3-52　初孫出生時年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C－Ⅰ	48	53.8	56.5	58.8	5.0
	C－Ⅱ	63	48.2	50.7	55.8	7.6
女	C－Ⅰ	55	46.4	51.0	55.9	9.5
	C－Ⅱ	55	47.1	49.4	52.1	5.0

ひ孫の有無についてもみておくと、C－Ⅰの男性で14.6%、女性で42.2%、C－Ⅱの男性で3.1%、女性で8.8%の人にひ孫がいた。コーホート間の差は、年齢順での経験と考えられるが、それにあわせて、C－Ⅰの女性で経験率が高いのは子どもをもつ年齢が男性よりも総じて早いためだろう。

3.3.7　まとめ

以上、家族経歴上の出来事経験を、コーホート別、男女別に比較してきたが、最後に、ここまでで明らかになったことをまとめておこう。その際、ここでは、主に、男女間の共通点と相違について述べることとし、コーホート間のそれについては、本報告書の最後で一括してふれることにしたい。

まず、子ども役割から述べよう。個人が親のもとに生まれるときに、出生順位と性別によって異なった役割を与えられるが、なかでも、あととりとしての役割をもつかどうかは、男女間で大きく異なる。とくに、最年長の男子だけが家産や先祖の位牌を相続・継承できるとされる沖縄では、このことは、とくに大きな意味をもっている。加えて、近年では、そうした男子優先を改めるべきだという運動も起こっている。こうした点をふまえて、大正初期から昭和のごく初期までに生まれたわれわれの対象者をみると、自分があととり予定者であった、あるいは実際にあととりになったと答えた女性は、ほとんど皆無であった。一方、男性は、少なくとも半数は、あととりとしての役割をもっていた。

男性と女性それぞれが、生まれながらにして与えられる立場の違いは、親からの自立という、子ども役割の変容過程を、多少とも異なったものにしてくる。まず、女性は、遅かれ早かれ、結婚して、親のもとを離れ、経済的にも親から独立することが期待される。したがって、離家や経済的独立は、ほとんどの女性が経験する出来事である。これに対して、男性であととり予定者の中には、こうした出来事を経験することは必ずしも期待されない。実際、われわれの対

象者のばあいも、これら２つの出来事は、男性よりも女性に経験率が高かった。とはいっても、その差はさほど大きなものではなく、男性の 9 割近くは、離家を経験していた。しかし、経済的独立となると、経験率は８割前後に下がった。

このことと並行して、経済的独立を果たした後の、親への援助のしかたにも、その内容によって男女差がみられた。すなわち、経済的な援助は、男性が女性よりも経験率が高く、反対に、非経済的な援助は、女性が男性よりも高かった。おそらく、女性は結婚後、少なくとも家計の面では夫の家の成員になるため、婚家の家計からの支出につながる経済的な援助は行われにくいのだろう。それに比べると、介護や日常生活上の世話を含む非経済的援助は、男性よりも女性のほうがよく行うということだろう。

そして、結婚後の自分の親との同居も、当然、男性にはめずらしいことではないが、女性のばあいは、まれな経験である。自分の親か配偶者の親かを問わず、結婚後の親との同居の経験そのものは、女性のほうが高いが、女性のばあいは、そのほとんどが配偶者の親との同居であった。

つぎに、夫婦役割を構成する出来事の経験についてであるが、まず、男女間で顕著な差があるのは、結婚（初婚）年齢である。われわれの対象者のばあいも、あらかじめ予想されたように、女性が男性よりも若かった。この結婚の時機の違いは、あとでみるように、当然、親役割出来事の時機の違いとなってくる。

われわれの対象者のばあい、夫・妻役割の喪失経験は、男女間でかなり異なっていた。それは、寿命の短い男性が、自分よりも若い、寿命の長い女性と結婚することによる、いわゆる人口学的な条件によるものばかりではなく、戦争という歴史的条件によってももたらされた違いであった。すなわち、配偶者との死別は、コーホートを問わず、女性のほうが男性よりも経験率が高いのであるが、なかでも、C－Ｉの女性のそれは４分の３にものぼっていた。さらに、そのうちの４人に１人は、終戦までに夫を亡くしていた。ところで、そうして配偶者を亡くした後の再婚の経験については、男性に比べて女性にはほとんどみられなかった。

さきに、結婚年齢が男女で異なっていることを述べたが、当然ながら、この違いが子どもの出生や自立といった、親役割上の出来事の経験時機にも違いをもたらしてくる。いうまでもなく、子どもの出生や学業終了、結婚は、男性は

女性よりも遅い年齢で経験していた。ちなみに、調査時点では、子どもがすべて結婚した人が、われわれがある出来事を標準的と判断する基準となる、4分の3を超えていたのは、C－Ⅰ女性のみであった。C－Ⅰ男性とコーホートに女性では、これがようやく半数を超え、C－Ⅱ男性に至っては、まだ半数にも満たない。その意味で、調査対象者のうちで、子どもが完全に自立した人は、ようやく半数に達したといえる。

親役割について、もう一つ男女差がみられたこととして、既婚子との同居がある。同居経験率じたい、コーホート間で差があり、C－ⅠのほうがC－Ⅱよりも高いのであるが、男性と女性を比べると、後者が高かった。その理由については、すでに述べたように詳しくは今後の分析を待つが、おそらく、女性のなかには、夫を亡くした後、子どものところに身を寄せたケースが含まれているからであろう。

ここでは、本章で明らかにされた家族経歴の経験のうち、男女差を中心にまとめてみたが、ここに表れていた男女間の相違は、どちらかといえば、激動の時代を生きてきた対象者たちのおかれた社会的・歴史的条件によるものというよりは、文化的に規定された人生（ライフコース）の発達パターンの男女差によるものが大きいといえるだろう。

（大田純子、原槙貴、比嘉俊次、森本博勝）

4　教育経歴

本章では、対象者の教育経歴をとりあげ、加えて、対象者の親、配偶者、子どもの学歴についてもふれる。ここでは主に文部省令校での教育経歴を分析の対象とする。実査では28の学歴カテゴリー（学歴なしを含む）を用いたが、ここではそれらを表4-1のように、初等・中等・準高等・高等の４カテゴリーに分類して用いた。なお、終戦後の米軍の軍政下で設置されたいくつかの特殊な学校については、その学校の履修形態・性格などを考慮に入れた上で分類した。

表4-1　学歴分類表

	旧制	新制
初等	1．尋常小　2．高等小	17．中学
中等	3．中学　4．実業学校 5．高等女学校 4年制　6．高等女学校 5年制 7．師範学校　8．陸軍幼年学校	18．高校　19．沖縄文教学校 20．沖縄外国語学校　21．教員訓練所
準高等	9．高校　10．専門学校 11．高等師範　12．陸軍士官学校 13．海軍兵学校　14．陸海軍経理学校	22．高等専門学校　23．短大 24．大学校 2年制以下
高等	15．大学　16．大学院	25．大学　26．大学院 27．大学校3年制以下
		28．学歴なし

4.1 対象者の教育経歴

本節では、対象者の教育経歴を把握する。まず学歴レベルについて述べ、続いて、学校生活の終了時機を学卒年齢からみることにする。また、文部省令校以外での教育経歴、および教育経歴上での非日常的な経験についてもふれる。

4.1.1　対象者の学歴

対象者のほとんど全員が、学校教育を受けた経験がある。C-Ⅰについては、男女ともに旧制の教育制度のもとで教育経歴を終えている。C-Ⅱも男女ともにほとんどが旧制の教育を受けた人だが、中には新制の教育を受けた人もいる。男性は４人、女性は１人が新制の学卒者であった。

最終学歴については、プロフィールで簡単にふれたが、ここで再度詳しくみよう（表4-2）。学歴は、C-ⅠとC-Ⅱでは違いがみられる。C-Ⅰでは男女ともに８割以上の人が初等教育で学業を終了している。それに対し、C-Ⅱでは中等

教育を受けた人が大幅に増えている。また男性には準高等教育を受けた人が 2 人、高等教育を受けた人が 1 人いた。女性では準高等以上の教育を受けた人はいなかった。

表4-2　最終学歴レベル

		初等	中等	準高等	高等	なし	N (100%)
男	C-Ⅰ	85.7	12.2	-	-	2.0	49
	C-Ⅱ	74.2	21.2	3.0	1.5	0.0	66
女	C-Ⅰ	94.6	3.6	-	-	1.8	56
	C-Ⅱ	88.1	11.9	-	-	0.0	59

このことからもわかるように、今回の調査では男性に比べ女性の学歴は低い傾向にあった。C-Ⅰについてみると、男性の中等教育終了者が 12.2%(6 人)であるのに対し、女性は 3.6%(2 人)しかいなかった。C-Ⅱにおいてもこうした傾向は認められた。男性のうち、中等教育で学業を終了した者は 21.2%（14 人）なのに対し、女性は 11.9%（7 人）であった。

4.1.2　学校生活の終了時機

つぎに、学業終了時機をみることにする。ここでは、中退も学業終了に含めている。C-Ⅰの男女の学卒年齢の中央値は両者ともほぼ 13 歳であり、大きな違いはみられない。これは先述したように、C-Ⅰのほとんどが初等教育の学卒者であることを考えれば当然といえるだろう。C-Ⅱの男女の学卒年齢には若干の差がみられる。女性の学卒年齢の中央値はC-ⅠもC-Ⅱもほぼ 13 歳と一定しているのに対し、男性はC-Ⅰが 13.9 歳、C-Ⅱが 15 歳と 1.1 歳の上昇がみられる。四分位範囲は、どのコーホートも、それぞれ 2.0 から 2.4 年ときわめて狭い。すなわち、一定期間に集中的に学業を終了しているのである。これも初等教育終了者の多さから考えて妥当な結果だろう（表4-3）。

表4-3　学業終了年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	48	12.6	13.9	15.0	2.4
	C-Ⅱ	66	14.3	15.0	16.6	2.3
女	C-Ⅰ	55	12.7	13.3	14.7	2.0
	C-Ⅱ	59	12.6	13.6	15.0	2.4

表4-4　学業終了年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-Ⅰ	48	1928.3	1929.9	1931.2	2.9
	C-Ⅱ	66	1939.7	1941.7	1943.2	3.5
女	C-Ⅰ	55	1927.8	1929.4	1930.6	2.8
	C-Ⅱ	59	1938.6	1940.0	1941.9	3.3

学業を終了した年次をみると、C-Ⅰは、そのほとんどが第二次世界大戦が始まるかなり前

に卒業しているが、C-Ⅱは、多くの人が戦争の時期に学業を終了していることがわかる。とくに、終了年が遅い第３四分位数以降の、すなわち学歴が高い人たちは、戦争末期に卒業時機をむかえたといえる。後でもみるように、かれらの教育経歴は、戦争の影響をもろに受けたのである（表4-4）。

4.1.3　各種学校での教育経験

ここでは文部省令校以外での教育経験をとりあげる。なお、該当者が少ないため、対象者全体の平均的な出来事経験ではないと考えるので、経験年齢については省略し、該当者の実数と目的について述べることにする。

各種学校へ通った経験があると回答した人はC-Ⅰでは男性が４人（8.2%）、女性が７人（12.5%）、C-Ⅱでは男性が９人（12.5%）、女性が10人（16.9%）であった。全体的にC-ⅠよりもC-Ⅱのほうが経験率は４から5%ほど高かった。また男女を比較したばあいは、男性より女性の方が高かった。

各種学校に行った目的をみると（表4-5）、C-Ⅰの男性は就職、趣味、その他、不明が１人ずついるだけであった。C-Ⅱの男性は就職のためが４人、その他が５人であった。C-Ⅰの女性は趣味が４人が最も多く、ついで就職が２人、花嫁修業が１人であった。C-Ⅱの女性は、趣味が４人で最も多く、ついで花嫁修業が３人、就職・資格・その他が１人ずつであった。なお、男性でその他が多いのは、青年学校での軍事教練を回答した人が多かったためと考えられる。

表4-5　各種学校への通学目的

		就職	資格取得	花嫁修業	趣味	その他	不明	N
男	C-Ⅰ	1	-	-	1	1	1	4
	C-Ⅱ	4	-	-	-	5	-	9
女	C-Ⅰ	2	-	1	4	-	-	7
	C-Ⅱ	1	1	3	4	1	-	10

注：数字は実数

4.1.4　学校時代の非日常経験

学校時代の非日常経験は二つに分けて観察した。第一に学校関係のもの、第二に戦争関係のものである。学校関係の非日常経験は、休学・中退・留年・浪人・転校・飛び級の６つについて、戦争関係は、疎開・勤労動員・応召による繰り上げ卒業・出征の４つについて、それぞれ経験の有無をきいた。

学校生活上の非日常経験では、中退を除き経験率は低かった。男女・コーホートを通じて、休学1人、留年2人、浪人2人、転校9人、飛び級2人という少なさであった。学校生活上の非日常経験で最も多くみられたのが中退であった。C-Ⅰの男性では中退経験率が30.6%（15人）という高率であった。対象者のほぼ3人に1人が中退を経験したことになる。同じく女性のばあいも、ほぼ4人に1人が中退経験者である。一方、C-Ⅱは、C-Ⅰよりも中退率は低い。また、男性に比べると、女性は中退率は低い（表4-6）。

表4-6　学校時代の非日常経験
（中退経験率）

		卒業	中退	N (100%)
男	C-Ⅰ	67.3	30.6	49
	C-Ⅱ	89.4	10.6	66
女	C-Ⅰ	76.4	23.6	55
	C-Ⅱ	86.4	13.6	59

戦争関係の非日常経験の有無についてみると、対象者全体からみれば、疎開1人、勤労動員15人、応召による繰り上げ卒業4人、出征は0人と、その数は少ない。しかし、さきにもみたように、C-Ⅱのうちで、学卒時機が遅かった、すなわち学歴が高かった人たちは、戦争中に卒業をむかえていた。これらの人たちは、なんらかのかたちで、学校生活における非日常的経験をしているはずである。そこで、中等教育修了者のみに限って上にあげた出来事の経験の有無をみたところ、まず、C-Ⅰには、こうした出来事の経験者は1人もいなかった。これに対し、C-Ⅱでは、勤労動員の経験者は、男性17人中5人、女性7人中4人であった。また、繰り上げ卒業の経験者は、男性に4人いた。勤労動員は15人中14人をC-Ⅱの対象者がしめた。また繰り上げ卒業はC-Ⅱの男性のみであった。このように、C-Ⅱのうちで、学歴が高い人たちは、戦争によって、教育経歴が中断したり、勉学ができなかったケースが少なくなかったといえよう。ちなみに、沖縄戦で戦闘に参加した、鉄血勤皇隊やひめゆり学徒隊には、この出生コーホートの成員が多く含まれていた。そして、その人たちの多くは戦死したのである。したがって、われわれの調査対象者のうちのこれらの経験者は、その数少ない生き残りの人びとであるといえる。

4.2 両親の学歴

父の学歴はC-Ⅰでは男女ともに不明が2〜4割を占める。男性のばあい、不明と同率で学歴なし、次いで初等教育の順となる。女性のばあいは初等教育、学

歴なし、の順となる。C-Ⅱでは不明の数は減るものの、やはり初等教育、学歴なしの父が多い。ただし男性の父親は中等教育を終了した割合がC-Ⅰに比べ倍増する。C-Ⅱ女性の父親にも不明は多く、初等教育、学歴なしと続く（表4-7）。

母の学歴についても、不明率の高さ、学歴なし・初等教育終了の母が多いという点は父の学歴と共通している。まず不明率の高さについてはC-Ⅰ男性で40.8%、C-Ⅱ男性で22.7%、C-Ⅰ女性で39.3%、C-Ⅱ女性で27.1%という高率で、母の学歴は不明との回答があった。学歴なし・初等教育の割合が高いという点についてはC-Ⅰ男性の約3割、女性の4割弱が母親の学歴なしと回答している。C-Ⅱでは学歴なしという回答はいくぶん減るが、それでも男性で15.2%、女性で20.3%が母親の学歴なしと回答している（表4-8）。

これらのことから、父の学歴・母の学歴ともに不明率が高いため、また、今回本人と父母の学歴比較のクロス集計ができなかったため、断定することはできないが、父母の学歴は子どもと同等かそれ以下と推察される。これを裏付けるためにもクロス集計が必要となろう。

表4-7　父の学歴

		初等	中等	準高等	高等	なし	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	38.8	-	-	-	30.6	30.6	49
	C-Ⅱ	63.6	1.5	-	3.0	12.1	19.7	66
女	C-Ⅰ	35.7	1.8	1.8	-	23.2	37.5	56
	C-Ⅱ	42.4	6.8	3.4	-	13.6	33.9	59

表4-8　母の学歴

		初等	中等	準高等	高等	なし	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	28.6	-	-	-	30.6	40.8	49
	C-Ⅱ	57.6	4.5	-	-	15.2	22.7	66
女	C-Ⅰ	21.4	-	-	-	39.3	39.3	56
	C-Ⅱ	49.2	1.7	1.7	-	20.3	27.1	59

4.3 配偶者の学歴

配偶者のほとんどは旧制の教育制度の学卒者である。新制の学卒者はC-Ⅱ男性の配偶者（妻）8人のみである。いずれのコーホートも初等教育終了者の割合が極めて高い。すべてのコーホートの8割以上が初等教育終了者である。ただ

しC-Ⅰ男性では初等教育と中等教育しかいなかったのが、C-Ⅱ男性では準高等以上の学歴の配偶者（妻）をもつ人がでてくる。C-Ⅱでは準高等が2人いる。女性のばあいもC-Ⅰに比べC-Ⅱでは比較的高学歴の配偶者（夫）が出てくる。C-Ⅰでは夫が全員、初等または中等教育の終了者なのに対し、C-Ⅱでは準高等、高等の夫が出てくる（表4-9）。なお、対象者本人と配偶者の間にはいくらかの年齢差があることが考えられ、夫婦間の学歴比較も今後必要であろう。

表4-9　配偶者の学歴

		初等	中等	準高等	高等	なし	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	85.7	12.2	-	-	2.0	-	49
	C-Ⅱ	81.8	16.7	-	-	-	1.5	66
女	C-Ⅰ	81.8	7.3	3.6	-	-	7.3	55
	C-Ⅱ	84.5	10.3	-	1.7	-	3.4	58

4.4 子どもの学歴

子どもの学歴を、対象者と同性の最年長子についてみてみよう（表4-10）。すべての対象者は、調査時点において、同性の子どもがいない人を除いて、同性最年長子の学業終了を経験していた。全体的にみて、対象者本人の学歴がほとんど初等教育であったのに対し、同性最年長子では比較的高い学歴をもつ者が増えてくる。ただし、ここでも男性に比べ女性の学歴が低くなる傾向は同じであった。また、C-Ⅰに比べC-Ⅱの同性最年長子の方で比較的高学歴をもつ者の割合が増加した。

特に男性の同性最年長子で高学歴をもつ者の割合が多い。高等教育を終了した者の割合がC-Ⅰで19.1%（9人）、C-Ⅱでは30.6%（19人）となっている。これが女性のばあい、C-Ⅰで2.6%（1人）、C-Ⅱで5.7%（3人）となり、男女で大きな違いを見せている。また、C-Ⅰではみられなかった準高等教育の終了者がC-Ⅱでは男性で4.8%（3人）、女性で18.9%（10人）いた。このことから、C-Ⅰに比べC-Ⅱでは学歴の選択の幅が広がっていることが考えられ

表4-10　同性最年長子の学歴

		初等	中等	準高等	高等	N (100%)
男	C-Ⅰ	29.8	51.1	-	19.1	47
	C-Ⅱ	14.5	50	4.8	30.6	62
女	C-Ⅰ	66.7	30.8	-	2.6	39
	C-Ⅱ	18.9	56.6	18.9	5.7	53

る。

子どもの専門学校（各種学校）への通学経験についてみたところ（表4-11）、全体的に対象者本人に比べて、経験率が高かった。C-Ⅰでは男女ともに3割程度が「経験あり」と回答しているが、C-Ⅱでは男性の割合が減り、女性の方は増加している。男性の割合の減少は高等教育終了率の増加との関連が考えられよう。

表4-11　子どもの専門学校通学経験

		あり	なし	不明	N (100%)
男	C-Ⅰ	33.3	66.7	-	48
	C-Ⅱ	25.0	71.9	3.1	64
女	C-Ⅰ	32.7	67.3	-	55
	C-Ⅱ	38.6	61.4	-	57

4.5 まとめ

まず、対象者全体にいえることとして、学歴レベルは、大多数の人が初等教育修了者であったが、C-Ⅱでは進学者が増えていた。また、男性のほうが女性よりも、学歴は高かった。学歴のコーホート差を説明できる資料は、今回もちあわせていないが、その理由の一つとして、C-ⅠよりもC-Ⅱのほうが、県内のほかの場所からの転入者が多いことと関係があるかもしれない。まだ具体的な数値は算出していないが、実査の折に感じたこととして、転入者のなかでも、とくに、宮古、八重山など離島出身の対象者には、学歴が高く、したがって、社会経済階層が比較的高いと思われる人が多く含まれていたからである。

教育経歴のコーホート間の違いとして目についたことは、中退、戦時中の勤労動員や繰り上げ卒業などの、非日常的出来事の経験についてである。中退率は、C-ⅡよりもC-Ⅰのほうが高かった。C-Ⅰは、そのほとんどが第二次世界大戦が始まるかなり前に卒業したので、中退の理由が、C-Ⅱのような、戦争末期の状況によるものではなかったことは明らかである。おそらくは、経済的な理由で学校を続けることができなかったのであろう。これに対して、C-Ⅱ、とりわけ高学歴者たちは、戦争末期に卒業時機をむかえ、勤労動員や繰り上げ卒業などにより、教育経歴が戦争の影響を受けたのである。

（宮平隆央）